

(議事について、事務局より説明)
(会議の公開を決定)

議題 かながわ文化芸術振興計画に基づく評価について(案)
事務局から資料1-1～1-2について説明後、次のとおり審議を行った。

○伊藤会長

評価について、重点施策5項目についていくつかの調査を行っていかうとなっている。それぞれについて、単に参加者の数や満足度だけではなく、より深い、数値化できるような形で把握していきたいとなっているので、ぜひ御意見をいただきたいと思う。まず、重点施策1の、地域の伝統的な文化芸術の保存、継承、活用に関しては、ワークショップ等の取組に関する調査と、それから伝統芸能事業の発表鑑賞機会の取組の2つの形で、扱っていかうという考え方になっている。それぞれについて、特に参加者の状況、属性等々を明らかにすることによって見ていくのと同時に、参加者の満足度も含めた意見等々を、場合によって聞き取り調査を含め見ていくということだが、意見があったらお願いする。さらなる検討の視点のところに書かれている、伝統芸能に関わる人材の育成の検討するに資する内容になっているかどうかを把握できるかどうか、ということについて、いいお考えがあればお聞きしたいというのが事務局の方からの意見になっているがいかがか。

○兼子委員

重点施策2と3では、鑑賞機会と体験という整理をしているが、重点施策1だけワークショップと発表に分けていて、ワークショップも体験に相当するのではないかと思うが、ワークショップというかなり限定的な評価項目を挙げた理由、後ろの重点2と3と同じでもいいのではと思ったが、その意図を教えてください。

○伊藤会長

資料1-2に挙げられている、個々の事業に関して言うと、ワークショップの名前が出てくる事業というのが、2、3入っているんで、単にそこが意識されているのではないかと思うが、事務局の方で理由があればお願いします。

○事務局(高橋文化課長)

体験という書き方でも問題はないが、ここをワークショップという書き方にしたのは、ワークショップという事業がいくつかあるのと、それ以外にも、体験事業として行っているわけではないが、例えばホールで公演を行って、その付随する企画で小さいワークショップをいくつか実施しており、特に伝統芸能に関しては担い手の育成が1つの大きな目的なので、単なる体験というよりは、もう少し先に繋がるという意味でワークショップという言い方を使っており、ここはこういう書き方をしている。イの方も一般的には体験と鑑賞という言い方をするが、伝統芸能に関しては、一つは鑑賞機会を設けるという意味もあり、そういった場を設けることによって伝統芸能の団体の方の発表の場を提供するというような意味で、ホールでの公演をやっているということもあるので、イの方はそこで発表・鑑賞という言い方をしている。アに関して体験という言い方にしても大きな問題は無いが、こちらの整理上そのような言い方をさせていただいている。

○兼子委員

同じでもいいかと思ったが、理由があれば。

○伊藤会長

特にこの重点施策に関して言うと、後継者というか、継承者をきちんと育てていく、そういった意図に繋がっているかどうか、こういったアンケート調査でかなり大きな力点が置かれているのではないかと。したがって、一般の県民、あるいは青少年や子どもたちが体験したり鑑賞したりするのも非常に重要だが、より広い意味で、自分自身も伝統芸能を担っていきたいと思う人に繋がっていけるかどうか、ここでは事業の中身よりも、そういうものが成果を挙げているかどうかを調査によって見えてくれば、場合によってはその事業について改めて見直していくということもあるのではないかと思います。その辺で、アンケートの項目等々について御意見があればと思うがどうか。

○山田委員

アンケートの実施は、参加された方へのアンケートではないかと思うが、一般的な、より効果がはっきり分かるような仕掛けとしては、参加しなかった人へのアンケートが有効だと思う。今日お配りいただいた表に基づいて言うならば、人形芝居の高校から1校選ぶとか、あるいは小学校だったら山北の川村小学校を選ぶとか、あるいは中学校だったら、歌舞伎鑑賞教室に行ってきた中での中学校を選ぶとか、小中高1校ずつぐらいモデル校を選んで、参加した子と参加しなかった子での意識の差、なぜ参加したのか、なぜこういう古典芸能に興味を持ったのかということが分かるような質問項目にすると、せっかく県としてやっている事業の意味合いがよりクリアになるかもしれないと思う。

○友尻委員

今の話に追加になるが、発表の場で、子どもたちや一般の方に、そういった文化芸術を発表するのはいいことだが、子どもたちに継承者をつくるということで、どうしたらそういうふうになれるのか、というのが芸術関係は教えてもらえない世界なので、そういったところを、アンケートだったり、教える場を作ってあげたりするというのが、今後に生かされてくるのではないかと思った。

○伊藤会長

さらなる検討のところに書いているが、継続して参加しようという意識がどこまで示されるかどうか。事業自体は数がいくつか入っているが、学校が全部違っており、子どもたちが1回しか受けていない形になっている。その中から、さらに継続するための気持ちになるような、事業展開になっているかどうか結構重要ではないかという気もするし、この辺も含めて、御意見があればお願いしたい。

あるいは、皆さん方でよく似た事業を行っていて、参加者たちにアンケートを取ったりするときに、どういうところに着目して声を聞こうとしているのか、そういった自分の体験から、御意見があればぜひお聞かせ願いたい。

○井上委員

一般論になると思うが、先ほど山田委員も言われたとおり、参加していない人の声というのは非常に重要だという気がして、思っていることをどうやって吸い上げるのは大事だと思うが、実際、来ていない人に聞くというのは難しい。例えば、その参加された方も、喜んで参加された方と、ある程度ためらいを持って思い切って来た人と2種類いると思う。例えば、ためらいがありましたか、といったような項目と、そこに対して何がハードルでしたかという項目を聞くと、もしかしたらそのいらっしやらない方の感情みたいなものが浮き彫りになるかと思う。例えば、時間がハードルである方もいらっしやるだろうし、経済的なことがハードルだったり、あるいは人間関係が濃密になるのが嫌だったという方方もいらっしやると思う。そういうのが見えてくると、次の事業に繋がるではないかという気はする。私自身も、伝統芸能ではないが市民参加の演劇をやっている。参加者がなかなか集まらない、特に若い男性が来ない。あるいは30代・40代の男性がなかなか来られない。当然それは時間の問題もあると思うが、そういうのがクリアできると、参加者が増えてくるという状況があるの

で、参考までにというところである。

○伊藤会長

伝統文化関係は、県西・県央地域は結構盛んだが、大木委員、小田原市でも、色々やられているのではないと思うが、何か御意見はあるか。

○大木委員

小田原市では、相模人形芝居などの伝統芸能の後継者育成講演会をやっている資料1-2にある、昨年の2月に紅葉坂ホールで開催した歌舞伎鑑賞教室では、846人の観覧者が来たとあるが、団体の関係者が来られるのは分かるが、来られる方の属性というのを逆に聞いてもよいか。

○事務局（矢代文化事業GL）

相模人形芝居大会については、高齢の皆さんが毎年楽しみにされていて、往復はがきでの応募で限定的で、手間もかかるが、皆さん応募していただいている。今年も3月に南足柄のホールで開催予定だが、着々とお申し込みいただいているところで、本当だったらもっと若い方にも見ていただきたいところではある。根強いファンの方がいらっしゃって、毎年楽しみにされていると聞いている。先般、二宮高校でワークショップを久しぶりにさせていただいて、生徒の皆さんに御参加いただくとともに、小田原市職員の方にもお手伝いいただいたところである。

逆に、質問だが、ワークショップに関しては色んな仕立てがあって、ためらいがあった人や参加しなかった人の声が大事だと言ったときに、学校交流ワークショップは、好き嫌いにかかわらず、学年単位で体育館に集められ、強制的に見せられる。鑑賞教室に体験が加わるという形で、二宮高校だと、相模人形部があって活動している生徒さんはいるが、なかなか興味を持ってもらえないなかで、お行儀の良いアンケート結果をいただくという切ない状況がある。そのためらいのある人達の率直な意見を吸い上げる面白い項目があるといいというのは、皆さん行儀の良い回答をしていただいて、おそらくこの子たちは興味がなかっただろうと思うのに、興味ありましたに○をつけてお答えいただくのがちょっと辛いなというところはある。

例えばだが、能楽ワークショップに関しては、保護者の方が、お孫さんやお子さんを連れて参加しており、親御さんに無理やり連れてこられた子が、嫌だったよ実はこの回答がなかなか難しいのかなというワークショップになっているが、すごく興味を持って参加しているお子さんもいて、声を集めるということが、皆さん時間がない中でアンケートを書いてくださるので、要は平板的な項目になってしまう。集められて嫌々参加している人が多い事業のアンケートと、すごくやる気があって、これを機にもっと見てみたいとかそういうところに繋がる人が参加しているワークショップとで、同じアンケートでいいのかとか、諸々悩みつつ、ただ、県民の皆さんにお示しするには、同じ項目で聞いて、数をお示しするのが一番分かりやすい。そんな悩みがあるため、今回ここに議題で載せて御意見をいただいて、次のアンケート、そして、興味がない人には興味を惹いてもらえるような仕立てにはどうしたらなるのかなと。興味があって参加している子たちが、ワークショップの次に何に繋げていけるのかということ、何に興味があるのかが聞けるアンケートになれば良いと思っている。

○伊藤会長

おそらくかなり事業も多いので、密接な形でアンケートを取るのは結構難しいのかなと思う。今お話があったように、学校単位だと、全員参加して、ある意味強制されているので、好んでやる人と、嫌々参加した人がいるから、両方から声を上手く取ればよいが。お行儀のいい答えになってしまうと意味がない。その時に、高校生あたりだったらネットを使うと比較的先生の目を気にしないで、本音が出るのではないかという気はした。その他に、自分自身がやりたいと思って希望者が集まっているワークショップの場合には、また違った角度で聞く必要があると思うが、この辺で皆さんの方で、

アドバイスなり、御意見があればぜひお願いしたい。

○塚田委員

1つ、思いつきだが、例えば少人数でやる気があって来ている人たちのワークショップについて、より深く声を聞き取るために、例えばどれか1つのワークショップに狙いを定めて、そこでは、やや詳しいアンケートさせていただきます、というふうに最初からして、御協力いただけることが前提で、割としっかり目のアンケートを取ってみるということではできないのではないかなと思う。いきなり全部やる必要はおそらなくて、まず試験的にやってみて、例えば仮に10、20人ぐらいでも、全員がきちんと10分程度のいい質問の紙に答えてくれると、ものすごく色んなことが見えてくると思う。まずはそれを基にして、じゃあ他のところでも聞いてみたり、あるいはとにかくそこから何か始まるのではないかなという気がした。学校の授業に関しては、そもそも全員に聞くのは無理がある。先生の目があるという大前提では、そこはあえてあまり突っ込まなくてもいいのかなという気がする。行儀が良い答えが来るのが当たり前で、でもそれも仕方がない。けれども、行儀の良い答えをいただけること自体は、行政にとっては大事なことから、それはそれでいいのではないかなと思った。

○久野委員

若手支援をする助成の仕事をしているが、自分の財団でも若い層からの生の声を聞きたいと思ってアンケートをすることがある。書き込み式のアンケートだと、皆さんおっしゃったように、時間もないし、その時にパッと書くのは難しい。自身の財団では、今の塚田委員の意見と少し似ているが、興味を深く持っていらっしゃる方に、人数は少なくてもいいので、グループでインタビューを取らせていただく。アンケートと書いているが、インタビュー形式で実施するというのを時々している。そうすると、他の方から刺激を受けて、最初は言葉にできなかったことが、皆さん自分の中で今まで考えていたことが言葉になって出てくる。さらに、それが同席している他の人にもいい影響を与えるということが起きてきて、結構具体的なことを皆さんお話になってくださる。グループインタビューみたいなものをある程度取り入れれば、更なる検討が深まるのではないかなと思う。

それから、知り合いが高校の先生をやっているが、今、おそらく、高校生が先生よりもずっと、ChatGPTとか、QRコードによるアンケートに慣れているので、対面で書きなさいと言ってもこれも抵抗があるというか、慣れていないので書けないのだと思う。でも、そのままPC上の質問フォームの中で答えていくというのは、上手くて、その知り合いが実施したときには全校350人ぐらいのアンケートが一瞬にして集まったという。おそらく想定しているツールの使い方が違っているのではないかな、そこから研究した方がいいのではないかなと思う。

○伊藤会長

重点施策2・3・4と全部共通する話だと思いますが、事業によっては割と少人数参加のものや意欲のある人たちが結構来るものと、非常に大勢集めたり、学校のように半ば強制的に集めたりするものでは、やはり意見の聞き方が違うのではないかなという形で、今、久野委員が言われたように、少人数の場合に関しては、ちょっと詳しくヒアリングをかけたものが、そして大勢の場合には、ツールなんかも工夫していくということが1つのヒントかなという気がする。他に何か御意見あればお願いします。

○事務局（楯屋舞台芸術プロデューサー）

資料1-2の実施場所で見ただけであれば、青少年センターは年中事業をやっているわけだが、この中で、授業の一環で参加されているというパーセントは極めて少ない。歌舞伎教室は、国立劇場がまだ閉じてないときには、学校単位はだいたい三宅坂に行くので、日程的には青少年センターで見ることが少ない。だから、ほとんどが個人参加というのが、パーセンテージ的には非常に高いという

ことは、分かっていたきたいというのと、アンケートについては、特に中学生高校生の県下の子どもたちは、大会や研修会や講習会が年中あるので、その度にアンケートを半ば義務的に書く習慣になっている。だから回収率は極めて高い。その結果が、やっぱりいいように書くようになっている。

○平野委員

参加者のところに、例えば能楽ワークショップを3回やって、参加者が26人、11人、29人とあるが、どういう呼びかけをなさったのか。それと、問題として、小学生を対象に、能楽よりむしろ狂言の方がと思うが、この演目というのは分かるのか。資料1-2を見ていて、どういう演目で事業が行われているか気になった。それから、能楽のワークショップだったらむしろ高校生あたりを対象に呼びかけたほうがいいのではないか。ただ、この参加者数は、自由参加というか、呼びかけはどのような形だったのか。

○事務局（矢代文化事業GL）

呼びかけに関しては、連携している市町村の広報や、県のホームページを利用して呼びかけている。演目については、すぐに出てこなくて大変申し訳ない。今確認する。能楽の中で狂言の表現を入れるという工夫はしている。このワークショップは、親子で体験というところに特徴があって、小・中学校という形で募集をしている。

○伊藤会長

それでは、いくつかヒントになるような提案・意見もあったと思うので、重点2のほうに移る。

こちらの方は、芸術活動の充実等に関して、鑑賞機会、体験事業の取組についての調査などを、子どもと青少年と分けて、特性を把握して実施意欲を把握していこうというのが1つポイントになると思うが、この辺についていかがか。こちらの方も、継続して参加しようという意欲がどこまで高まったかどうかを見たいというような、深めていきたいというようなことも書かれている。

○桐生委員

先ほどのお話と重なると思うが、アンケートにしっかり答えてくれる児童生徒さんが多いということであれば、例えば、どこまで答えてくれるかどうか分からないが、このイベントに参加するのは何回目なのかというその回数を聞いて、複数回参加してくれている方がいるのであれば、どんなところが魅力で複数回参加するのかという質問をしていいかもしれないし、例えば、次回も参加してみたいかという設問を設けて、どんなことがイベントでなされれば、次回も参加してくれるのかというちょっと踏み込んだ内容のアンケートをしてもいいかなというふうに思う。

○伊藤会長

ほぼ毎年継続してやっていって、中間のときに、そのまま、変化みたいなものを見ていけるためには、何回目の参加かということは結構大きなポイントになると思って聞いていた。事業の方に関しても、なるべく多くの子どもたち、あるいは県民に受けてもらいたいこともあるが、評価という点からいくと、同じ人が2年続けて受けているときに変化しているかどうかというも結構重要なポイントになると思うので、この辺も事業によって、多少区分けしたほうがいいのかという気がする。

子ども・若者に絞った場合について、この辺は特に、アンケート等で押さえたほうがいいのかという話があれば、お願いする。

○山田委員

あえてだが、やっている皆さん方がどうしてもその95%以上が気になるということであれば、単純に質問の回答項目を逆に変えるだけでも全く変わってくる。さらに僕らの場合には、より回答精度を

上げようと思う場合には、似たような質問を2回繰り返して、矛盾が無い回答をしているかをチェックするが、そこまではする必要は無いと思う。QRコードの紙を配ってそれを写メしてGoogle フォームで3分以内というのが簡易的なアンケートの方法なので、先ほど言われた詳細ヒアリングでやるアンケートも意味があるが、より気楽に本音を聞こうと思えばそういうアンケートのやり方は有効かなと思う。

○伊藤会長

後でまとめてやろうかと思っていたが、5択か4択かどちらが良いかという話が先ほどあった。具体的に言うと、大変よかった、まあまあよかった、どちらでもない、まあまあ悪かった、非常に良くないみたいな形の5択というのと、それから、5択がどうしてもどちらでもないというところに集中しやすいという傾向があって、そのためにアンケート結果自体が曖昧になってしまう。むしろ4択にしたら、まあまあと、とてもというのとが両極に分かれやすいのでいいのではないかという声もあるし、でも、そうしたときに、どちらかという、こういうのに参加される方というのは好意的な回答する方が多いので、そうすると、まあまあ悪かった、非常に良くないの方がすごく減ってしまうのではないかという心配もあるというのが事務局のほうの悩みだそうである。

その辺で、アンケートが5択か4択かについても御意見があれば、これも重点項目によって、ここは5択がいいけどここは4択がいいみたいな話もあるかもしれないが、御意見があればぜひお願いしたい。山田先生、大学の授業評価のときに、中間的評価というのはどうしていたか。私は10年以上経ったので忘れてしまったが。

○山田委員

最近では減らす傾向で「なし」にすることが多い。ただ今回の場合、そもそも良い回答が多いのであまり影響はないと思う。

若干補足すると、アンケートの場合は継続した数字の取り方が大事なので、語順を変えるぐらいは構わないが、質問項目を変えてしまうとか、回答の選択肢を変えてしまうと、アンケートの継続性がなくなってしまうので、本当はあまり良くない。基本的には同じようなことを、10年から20年取るというのが統計的にはよろしいかと思う。

○伊藤会長

その他の検討の視点のところに、例えば事業の参加をきっかけに、舞台芸術活動を始めようというような意識の変化、そういったものが把握できるかどうかというのがある。結構難しい問題だが、この辺はどうか。久野委員がセゾン文化財団でやっている、どちらかというところでは結構プロというか、本気でやりたい人が中心であると思うがいかがか。

○久野委員

これを読んでいて思ったが、今、習い事など、色々やりたいことがたくさんある子どもが多いと思うが、でもそれが実現できない。家庭の事情だったり、自分自身の時間がないと子どもが言ったりという、色んなそういうことがニュースに出ているのでいうと、舞台芸術活動とか、人間性・創造性を育むような文化芸術活動を、彼らは望んでいるかどうか、何をしたいと思っているのかということをお本人たちに聞いてみるというのもいいのではないか。やっているかどうかを聞くよりも、何がやりたいか、どうしてそれができないのかということを考えることも大事なのではないかと思う。そうするとこの目的としているところで、何が、障がいとなって実現できていないのかということが明らかになり、次の施策の元になるのではないかと思った。

○伊藤会長

そうですね。今、結構格差が広がってきて、やりたいかどうかという意識さえも分からなくなってしまうような環境に置かれている人たちが増えてきているので、その辺を押さえていくと、次の必要な施策というのは見えてくるかもしれない。

○兼子委員

子どもと若者、青少年ということだが、親が参加させるということがあると思うので、親の意見というのも結構重要になってくるのかなということを思うと、小学生などの意見を聞くのは重要だが、兵を射るか馬を射るかということだが、親の意見というのも書いておいたほうがいいかと思った。

○伊藤会長

そうですね。特に小さい子どもは親の意見はけっこう大事ですね。

○兼子委員

イニシアティブが大きいと思いますので。

○伊藤会長

重点3の方も見ていきたいと思う。重点3と4は重なる部分が多いと思う。重点3が高齢者・障がい者の文化芸術活動の充実、それから重点4は国際交流、観光分野との連携だが、特に評価では理由のところに書いてあるように、事業に参加していない外国籍県民の参加を促すための指標が見えてくるかどうかとなっている。どちらかというとも3、4とも、文化活動、あるいは鑑賞にしても参加に関しても、ハンディがあるというか、少し不自由がある人たちに対してどういうふうにアプローチをしていくかということと関連してくると思うので、ご意見が共通する場所であればぜひお願いしたい。3の方に関していうと、結構重要なのが、参加者の意識変化というものをもう少し丁寧に、調査していきたいということも、今までの振興計画の作成、あるいは毎年度の年次報告のほうで出たのではないかと思う。

○塚田委員

重点施策3の、現在実施しているアンケート項目を見ると、他よりはものすごく詳しい感じがして、すでになんかなりしっかり取られているような印象がある。他の重点施策に比べて、それは例えば学校単位でやるものがないからなのかなど色々考えるが、それでも更にまだ足りないというお考えで、共生社会の実現に向けて、事業に参加した人が意識の変化があったかを把握できる項目があれば良いという考えということなのか。これは大分高度な要求のような気がして、これを要求しなければいけない事情が何かあるのかと思ったが、そこはいかがか。

○事務局（小板橋マグカル担当課長）

共生社会が高齢者から障がい者から多文化共生からということなのでかなり対象が幅広くて、見ていただいた現在実施しているアンケート項目、身体や体調の変化、心や気分の変化といったところだが、これは主に重点3の県営団地におけるシニア合唱事業で取っているアンケートである。これは県営団地の方で合唱の練習をして発表会をするという立て付けだが、目的としては、県営団地のコミュニティがかなり低下しているということで、コミュニティの再生ということ、それから何よりも住んでいる方たちに音楽に触れていただきたいという、文化芸術の振興の考え方。あとは、声を出すことによってお元気になっていただきたいという健康増進の考え方もある。コミュニティの再生、文化芸術の振興、健康増進という考え方があるので、身体や体調の変化、心や気分の変化というのをピンポイントでお聞きしているところである。

一方、共生共創事業や多文化共生と言うと、個人の利便的な項目もあるので、例えば障がい者と一

緒に鑑賞したり、障がい者の視点で鑑賞したりしたときにどう見えるかとか、それから外国の方から見たときに、参加しやすかったのかというような目で見て、それがその理解に繋がっていくということに、行動変容に持っていけたらいいのかなというところで、さらなる検討の視点ということで、伊藤会長が先ほどおっしゃったように、いらした対象の方によって、項目というのがきめ細かい手当しなければいけないところがあるかもしれない。今のご指摘をいただいて思った。

○伊藤会長

関連することでどうか。これを見て非常に面白いと思ったのが、参加者の意識の変化の③に、インターンシップ等で参加した学生の意見というのを捉えていこうというのが入っている。ロジックモデルという形で今まで、共生共創事業について、いくつか議論していたわけであるが、そのときに、障がいを持った方であるとか、あるいは高齢者の方、それから見た人たち、それからさらに関係しているスタッフの人たち、あるいはボランティアの人たちの意識の変化なども、チェックしていく必要があるのではないかと、何回かこの場でも議論したと思う。これに関しては、おそらく、力を入れて、県の方も取り組んできたこともあって、項目が非常に豊かに作られているのではないと思うが、この辺の経験も生かして、項目も豊かにしていくことが重要なという気がする。

○事務局（高橋文化課長）

共生共創以外のところは、共通項目ということで書かせていただいている、それぞれの事業でこれ以上にいろいろなアンケートは取っている。ここは結構バラバラで、全体をまとめて見ようと思ったときに、その事業だけであれば、いろいろな結果が出ているが、共通で見られるところがないというような状況にある。こういう形で示させていただいた中で、少し共通項目を増やしてもいいのかと思っている。そうすると事業全体として、課題があるなどが見えてくるのではないと思う。共生共創事業は新しい事業というところもあって、事業の目的や、この中でやっていくというのはしっかりしているので、ある程度項目なども含めてきっちり取っているという部分があり、他の事業も共通の項目を増やすような形で今後考えていきたいと考えている。

○伊藤会長

重点施策4の多文化共生について、御意見があればお願いしたい。

○井上委員

共生の問題と多文化共生の問題。私は、直接色んなことやっているわけではないので分からないが、先ほどからお話があるアンケートからなかなか吸い上げられない声をどうやって吸い上げるかということを考えたときに、あくまで私の経験だが、講師が、その参加者から、休み時間などに話を聞くということがある。例えば、私が今やっているお芝居の参加者からは、お母さんがもうお財布にお金がないって言っていましたという声があった。つまり、参加費が高くて、苦しいってことを言っているが、おそらくそれは、アンケートを取っても出てこない声だと思うので、できるかどうか分からないが。講師に対するアンケートを取ると、参加者の生の声を聞いているのではないかという気がする。私の経験からだが、そういうことをやると。何か知らないところ、知らない声を吸い上げることがもしかしたらできるのかなというふうに思った。

○伊藤会長

そうですね。講師の声は結構重要ですよ。それで思い出したが、3～4カ月前にアーツカウンシル東京が開催したシンポジウムを聞いたときに、確か東京芸術劇場のほうで新たに取り組んでいる事業で、日本語を母語としない子どもたちと一緒に演劇等々を作っていくにあたっての課題の説明があって、その時に、講師の方が休憩のときの声というのを大事にしている話をされていたので、確かに

こういった、調査の共通項目を増やしていこうという方向と、もう1つは個別の特徴をいかに掘っていこうかというのと、両極に分かれているのではないかと思います。個別の方に関して言えば、そういう視点もありかなという気がした。

○中村委員

ここまでの議論全般に関わるが、参加者以外に聞くという発想はもっと持っていていいのではないかな。参加者以外で誰に聞いたらよいかという点について、重点施策4に関する井上委員のご発言のように、重点施策3と4はこの場で共有されたように思う。重点施策1と2においても、実施場所がどういうふうにしてその事業を見ていたか、実施に関わった文化団体はどう感じたか、聞く意味はあるのではないかな。それこそ重点1なら、保存継承活用をまさに担っている団体が、参加者をどう見ていたかということも重要である。重点2は児童福祉関係の方、親が連れてこられないような家庭は児童福祉と繋がっている可能性もあるので、そういったところに聞いてみてもよいのではないかな。評価を考えるにあたり、全体的に、参加者からのフィードバックに若干寄りすぎているところはあるかもしれない。

○伊藤会長

重点5で今までと違った視点として、更なる検討の視点の中に、プロフェッショナル人材を目指す参加者という、どちらかというと一般の県民、あるいは子どもたち等々ではなくて、プロ志向が高い参加者の人材育成の問題についても入っている。視点が違うので、これについて何か御意見があればぜひお願いしたい。

○塚田委員

これは本人たちに聞くのが一番いいと思うが、今の中村委員のお話を受けていると、もちろん本人たちに聞くのが一番だし、横浜はここにも出ているように、たくさんの発表の場を持っているので、そこでアートマネジメント、運営方法に関わっている方々の御意見を、アンケートを取るというのもすごく重要なと思う。プレイヤーに聞くというのは、どこも共通して同じ質問項目にならないと思うが、プレイヤーたちにも聞く、当事者にも聞く、両方の視点があつた方がいいのではないかなと思う。また、教育現場にも聞くというのは、プロを育成する教育現場がたくさんあるので、そこに聞くのも重要な視点である。

○伊藤会長

重点施策5のところでは、施設の利用や利便性の向上ということも評価のポイントとして挙がっている。これについて御意見があればぜひお願いしたいと思う。利便性だけではなくて、安全の問題というのも大きな課題だと思うし、地震も含めた様々な災害対策もあるだろうし、あるいは、新型コロナウイルス感染症のような感染症対策というような問題も含めて、もし御意見があればお願いしたい。また、アンケートの4択、5択についても御意見があつたらお願いしたい。

○兼子委員

5択だと、中間があつて評価が両側に2つという感じ。4段階だと、評価は両サイド2つずつだが、おそらく、不満があまり出てこないのが、単極というか、例えば満足でない・やや満足・満足・とても満足というふうにして、そういう単極の4段階にすると、この満足側の辺の細かいところも取りつつ、選択しやすくなるのではないかなということ考えた。あまり不満側が出てこないというところがあつたので、そういう4段階があるのではないかなと思った。

○井上委員

この人材育成についてだが、演劇のアートマネジメントをやりたい子たちがいると同時に、舞台スタッフになりたい子もいて、人材育成はおそらく、技術的なことはかなり多い気がするが、プロフェッショナル人材になることを目指す参加者が、どのようなものを求めているかという。おそらく現場では技術は当然身につけたいと思うが、プロフェッショナルだから、職に就くにはどうしたらいいかということが実はかなり、大きな課題のような気がして、技術があっても就職できないという場合が十分考えられると思う。その視点がワークショップ自体にも、アンケートにもあまり見られない気がするので、それを吸い上げられるかというか、あるいはワークショップの中に、そういった内容が組み込めるのかも含めて検討されたほうが、プロフェッショナルということを考えたら、道が広いと思う。我々の仲間の若い子たちは大体、とにかく現場に入ってしまったって経験を積んでいくというケースが多いので、ワークショップを経由して、もちろんそういう方もいるだろうが、どこか学校に入って技術を身につけて、そこから就職するというパターンか、現場でスキルを身につけてそのままプロになるという道しか今のところないような気がするので、その視点があるとより良いかなというふうには思った。

○伊藤会長

それでは、意見も出た感じがするので議題については終了する。3のその他という形で、基本的には、報告事項で審議事項ではないが、皆さんのほうで非常に関心が高い県民ホールについての話もあるので、御意見等々もしあればお願いしたい。事務局のほうから説明をお願いします。

その他 (1)神奈川県立県民ホール本館の建替えについて 事務局から説明後、次のとおり質疑を行った。

○伊藤会長

表面のほうについては、このような形で決まったという話であるが、御質問等がもしあればお願いします。裏面のほうの、休館後の取組については結構重要な問題で、こちらについてはもう少し議論したほうがいいのかもしいないので、例えば、こういった形の活用はできないかなど御意見があればぜひお願いしたい。

○久野委員

建替えについての大前提が、本格的なオペラやバレエ、舞台芸術の上演ということが、一つ掲げられていて、これが今すぐ建替えまでには時間がかかるだろうという話だったが、どれくらいで立ち上がるという予測をしているのか。未来でオペラとバレエがどうなっているのかということを何か検討されたうえでの案かということを知りたい。

○事務局（高橋文化課長）

まずオペラ、バレエということで、これも議会の知事の答弁で公表させていただいた内容になるが、なぜそういった形で出させていただいたかというところについては、やはり今、特に海外の一流のオペラやバレエというのが日本に来たときに、関東圏のどこで公演するかというと、東京なら東京文化会館、神奈川の場合も、ほぼ神奈川県民ホールでしかやることがない。要は、キャパの問題、交通の問題、あとは設備の問題というところで、ほぼ一択だというふうにプロモーターの方からは言われている。そういった中で、県民ホールが無くなるというところで、将来のオペラ・バレエがどうかという問題はあるが、やはり、県民の方に身近なところで、一流の芸術を見ていただくという機会は確保したほうがいだろうというところで、引き続きオペラやバレエもできるような、ただ、オペラ・バレエができるとある意味総合芸術といったものになるので、それ以外の、普通のコンサートも当然できるし、ある意味総合型の劇場にしていこうというような意味合いでの公表になっている。ス

ケジュールに関しては、それも含めて来年度、構想の中で検討していくことになるが、一応、他の自治体の事例も今調べていて、同じ場所で建替える場合というのを調べると、どんなに短くても、閉館してから5～6年、長いところだと10年ぐらいかかっているところもある。我々としても、できるだけ休館期間を短くするように取り組んでいきたいと思っているので、そのあたりも含めて、来年度、どういうものにするかとあわせて、どれぐらいのスケジュールでやっていくかということを検討していくという状況である。

○伊藤会長

今、国立劇場の問題もあるので。

○山田委員

議会でも、無事、承認されてあとは粛々と進めていただければと思うし、オペラ等々やっていくことについても、目標は高くする方が良いのかなとは思っている。先ほどの評価の方にも多少関係するが、基本的には、こういう文化施設が全部、海沿いに集中しているというのが、神奈川県の場合は大きな問題でもあって、私は小田急線沿い居住だが、こちらまでわざわざ来るよりは、東京に行った方が全然早いし、そういうような現状があるので。神奈川に持たないといけないと言われると、いやそれはもうそういう時代ではないというふうに言わざるを得ないところがあって、そうではなくて、東京と同じものを神奈川にもう1個作りましょうという発想ではない発想で進めていただく方がむしろいいのではないかなと私自身は思っている。それと同時に、もう一つは、例えば、私が住んでいる近辺は、昭和音大、日本映画大学があるので、川崎市が中心となってそれらの施設とのハードとの共用を調整したうえで様々な施設ができあがってきているということもあるので、既存施設とどううまく、調和というよりはむしろ調整しながら、そこにないものを作っていくと。同じものを、近いところに2つ作るのではなくて、違うものを作っていくという形をぜひやっていただきたい。同時に、単にハードだけではなくて、サテライトも含めて、神奈川県全域の利益になるようなものを作っていたきたいと思っている。ぜひよろしくお願ひしたい。

○中村委員

県外から来ているので住民の視点ではないが、ぜひこの、5～6年から10年はかかるであろう建替期間において、県内各地での市町村の文化ホールなどを活用した取組を、むしろチャンスと捉えて積極的に展開していただきたい。委員として強く要望申し上げる。

○伊藤会長

私も個人的な意見を言うと、神奈川県には横須賀と鎌倉にオペラやバレエも可能な劇場があるが、非常にもったいない使われ方をしている。休館期間に2つの劇場と連携できないのかという気はしていて、特に鎌倉芸術館だと交通的に決して不便ではないので、せっかく県民ホールで培ってきたノウハウや、知恵を生かして、協力し合っていくようなことができるといいなという気は、私は個人的には感じている。

○事務局（高橋文化課長）

先ほど、休館中に市町村の文化施設などを使うということで、ハード面だけではなくてソフト面や連携というお話もいただいた。今までも、例えばK A A Tで実施した公演を市町村の文化施設で巡回公演するというような取組は行っているが、そういったことをもう少し強化して、例えば市町村と共同で制作をしてみるなど、休館中にもっと繋がりを深めて、それが新しい県民ホールができたときに、もっと今まで以上に、市町村の施設とも連携を深めて相互に盛り上げていけるような形にしているのが理想と思っている。そういったことも含めて、できるだけ多くの地域で事業展開をしていく

いというふうに考えている。具体的に、またこれから、各市町村ともお話をさせていただいて、一方的に押し付けるのではなく、一緒にやっていけるようなものを考えていければいいと思っている。

○伊藤会長

大木委員、小田原三の丸ホールはどうか。

○平野委員

よろしいか。どういうパターンになるかはまだ決まってないわけですね。ぜひ、キャパ500ぐらいの本格的な室内楽ホールを作ってほしいと思う。例えば都内だと、上野の東京文化会館は取り合いになっていて、小さいアンサンブルが会場を借りるのがすごく大変。大ホール・中ホールだと、集客が5割ぐらいにしかなく、非常に採算がとれない。小ホールを見つけるのもすごく大変なことになっているので、ぜひ、本格的な小ホールが併設されるとよい。先ほどあったように、都内に行く人が多い、横浜市民のクラシックファンの大半は、東京の演奏会にほとんど行っていると思う。だから、室内楽専用の小ホールはできれば別途併設していただきたい。

○大木委員

これまでも連携していただいております、この数年間は、より連携をお願いしたいところである。小田原三の丸ホールは来年度から指定管理になる。直営から運営が変わってくるので、指定管理者を含め相談していきたい。

○伊藤会長

休館中の活動について他に何か御意見あれば。

○塚田委員

最低でも5～6年かかるということで、先ほど、ぜひ県の他のホールでの取組の強化というお話があって、その通りだと思った。そうなってくると、やはり人材が必須ということになるのは皆さん想定内だと思うが、制作や運営に関わるような人たちがいなければ、例えば一緒に作品を作るなんてことはとてもできないし、5～6年がすごく実り豊かになるには、今から人材育成の方に予算がきっちりついて、動いていかないとなかなか厳しいのではないかなというふうに思った。だから、建物の話は建物の話でしなくちゃいけないし、その予算とは別立てで、人件費、何百億かかるわけではないので、ぜひそこは具体的にお考えいただけたらなと思った。

○伊藤会長

特に長期にわたる建替えなので、スタッフの人たちもばらばらになりかねない。10年間空いてしまうと、本当にスタッフの人たちがもたないということもあるので、人間集団としての制度のあり方も含めて検討していただきたい。それではちょっと時間も迫っているので、次に進めていきたいと思う。条例の問題と、指定管理の選定基準等々を、これは議会報告された話なので、とやかく言う話ではないが、こういう形で県の方で考えられているということで説明をお願いしたい。

その他 (2) 利用料金の改定に係る条例の改正について、(3) 指定管理者の選定基準について事務局から説明後、次のとおり質疑を行った。

○伊藤会長

条例の改正に関しては、基本的には条例というのは文化施設の場合はほとんど利用料金が中心になっているので、その部分がコアになっているが、県民ホールに関して言うと、直営にいったん戻すよ

うな大きな話がある。それに関して、やや心配なのは、今財団にいるスタッフたちが、どうなるのかと、彼らが持つるノウハウというものを、例えば休館中に、現在の他の施設で今度やっていくときに、うまく活かす道があるかどうか。この辺がやや気になったが、これは私からの質問である。

○事務局（高橋文化課長）

基本的には、来年度はまだ指定管理期間が1年間残っているので、建物の管理と、建替で、中の備品や諸々の消耗品の整理をしなければいけないということもあるので、それも含めて、芸術文化財団にはお願いしたいと考えている。指定管理の切換えの話は令和8年度からということで、具体的にはこれからにはなるが、やはり、今お話があったように、休館中の取組というのを県直営でやるわけではないので、例えばその指定管理で行っている今のK A A Tの巡回公演みたいものを増やすであるとか、何かそういった形で、全部ではないにしろ、一部については財団に担ってもらわなければいけないと思う。財団と当然お話をさせていただいているが、定年で辞められる方は別としても、そうでない方は配置転換をしたり、あとは事業をやる方はそういった休館中の取組に一部関わっていただいたり、そういったことで対応していきたいと今のところは考えている。

○伊藤会長

もう1点確認のための質問だが、指定管理者の選定基準に関してである。県の施設は全て公募ではないですね。

○事務局（高橋文化課長）

非公募である。

○伊藤会長

したがって、もちろん非公募だからといって選定基準が甘くていいわけではない、きちんとやらなくてはいけない。そういう意味で、今回出されていることというふうに解釈してよろしいか。

○事務局（高橋文化課長）

議会の方にも、最終的には公募にすべきではないかという御意見もあるが、次回に関しては特に県民ホールがなくなる中で過渡期というものもあるので、非公募で芸術文化財団に引き続きお願いしたいというお話をさせていただいている。

○伊藤会長

ということを前提に御意見、御質問があればお願いしたい。施設の話も出たので、重点項目5に施設の管理という話もありましたので、追加で案件があればそれを受け付けて、なければ終わりにしたい。特にないようなので、特に議題の方の、評価に関して意見があれば、事務局の方に1週間ぐらいの範囲で、メール等々で出していただければと思う。それではこれもちまして本日の審議を終了する。